初見演奏能力からみたシニアへの効果的なピアノ指導（１）
―年齢別、経験別、年数別の調査結果を中心に―

生涯学習音楽指導員
三上香子

はじめに

かつて日本では、一般の高齢者と音楽に関する研究がみあたらないことが指摘されていた[1)]。しかし余暇活動として音楽学習をする高齢者が増加している社会的背景から、徐々に高齢者とピアノ学習に関する研究も行われるようになってきた[注1)]。例えば、元吉ひろみは50代を「シニア」、60代と70代を「高齢者」とし、ピアノ学習をすることにより不安感情の改善と手指機能の維持や向上がみられることを指摘した[2)]。古庵晶子は、50歳代以上を「シニア」、70歳前後以上を「高齢者」とし、ピアノ教材の研究を行った[3)]。さらに古庵は、50代から70代後半のピアノ学習者全般を「シニア」とし、演奏時のミスについても言及している[4)]。このように先行研究では、年長者の心的健康やエイジング、学習環境や演奏状態など多方面の視点からのアプローチがみられる。しかしこれらの研究には、年長者を表わすことばとして「高齢者」と「シニア」の両方が使用されていることや、調査対象の年齢層がそれぞれ異なるなど、統一性に欠けると思われる面が否めない。また、筆者は以前から広い年齢幅をもつ年長者を一括りにしてよいのかという疑問をもっていた。なぜなら、超高齢者社会の日本では、60歳以上の年齢層の幅は、日々広がっている。そして、その幅に対応した発達段階があり、それに相応した学習や指導が求められるからである。このことから、年齢層に着目した研究が必要であると考えられた。

１．調査の目的

そのようななか、石川裕司から、高齢者のピアノ学習支援において、前期高齢者と後期高齢者の違いについて言及する必要性が指摘された[5)]。そこで本研究では、60歳以上を「シニア」とし、かれらに対して初見演奏能力判定を実施し、得られた結果を年齢層別、成人までの学

習経験の有無、成人後の学習年数別に集計することで、それぞれの特徴についてあきらかにすることにした。

調査対象者に60歳以上を選択した理由は、60歳が一応の定年を迎える年齢であることや、子育ての終了が予想されることからピアノ学習を開始しやすい年齢であると考えたからである。また、ＷＨＯにより「高齢者は65歳以上とする」と定義されているため、本研究では年長者を表わす言葉として「シニア」を採用した。

２．調査の協力者と調査の方法

(1)　調査の協力者

調査協力者は、カルチャーセンターや指導者宅で定期的に学習を継続しているシニアのピアノ学習者(60歳以上　全員女性)34名である。次の図表１は、調査協力者の成人までのピアノ学習経験と成人後の学習経験を示したものである。彼女らの平均年齢は70.2歳であった。

表１　調査協力者の年齢層と経験年数と学習年数　（2019年５月現在34名）

年齢層	経験年数	学習年数	年齢層	経験年数	学習年数
60代前半（4）		4カ月	70代前半(7)		6カ月
		7カ月			1年
		8年			1年半
	7年	7カ月			1年7カ月
60代後半(12)		3カ月			2年半
		8カ月			8年
		10カ月		5年	1カ月
		1年1カ月	70代後半（9）		5カ月
		8年			10カ月
		9年			1年
	7年	6カ月			1年半
	5年	1年			1年10カ月
	1年	1年10カ月			3年
	5年	2年			3年
	1年	2年4カ月			4年4カ月
	1年	6年		2年	4年
			80代前半(1)	6年	19年
			80代後半(1)	3年	1年半

（　）内の数字は人数、経験年数は成人までの学習年数、学習年数は成人後の学習年数をあらわす

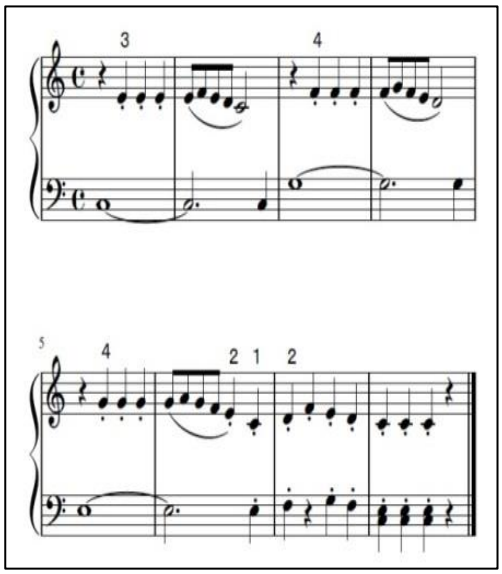
(2) 調査の方法

調査では調査協力者全員を対象に、初見課題を使用した能力判定を実施した。調査は、2019年５月８日から５月31日にかけておこなわ

れた。調査の流れは、楽譜を渡して5分間練習した後に弾いてもらい、音・左右の運指・リズム・テンポの4項目のミスの状態をみた。なお一般的な初見演奏判定は、数十秒の予見後に演奏し、短時間で楽譜を効率よく読んで正しく演奏できるかどうかをみることをいう。しかし本調査では、演奏者の演奏能力全体をみることを目的としたため、長めの予見時間を設定し、時間内であればピアノ練習も可とした。

初見課題は、市販のワークブックを参考に作成した[6)]。選択基準は、8小節の1部形式で部分的に指使いの記載があるもの、右手は5指を少し超える程度のもの、左手はナチュラルポジションで単音伴奏形を用いたものを採用した。スラー、タイ、スタッカートも、ミスの判別対象とした。なおこの課題曲は、フレーズの開始と終止は左手だけが拍をとることから、両手でのリズムの取り方に工夫が施されているといえる。したがって、正確にリズムをとることができるかどうかが、演奏レベルを判断する大きなポイントとなることが予想された。次の譜例1は、初見課題の楽譜である。

譜例1　初見課題



3．調査の結果

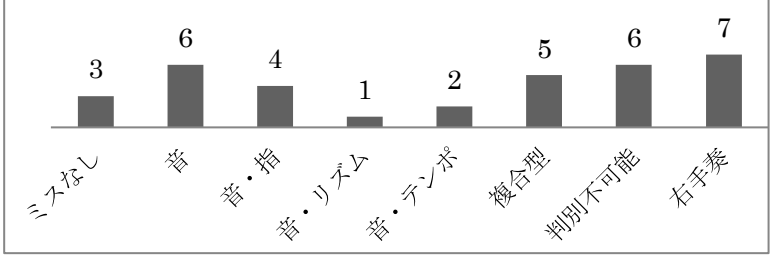
ここでは、はじめにミスなし、音ミスのみ、2項目のミス（音と運指、音とリズム、音とテンポ）、3項目のミス（複合型）、判別不可能、右手奏の8つのミスの調査結果を述べ、その後にこれらをまとめた年

齢層別・学習経験別・学習年数別の集計結果を記載する。

(1)　ミスの種別による調査結果

次の図表 2 は、調査のミスを種類別に分類した表である。

表2　ミスの種別人数



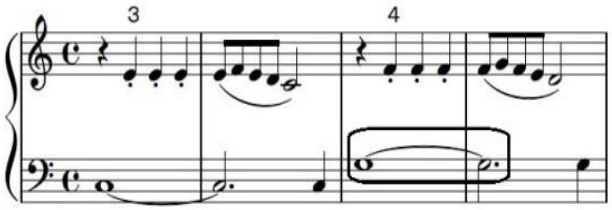
①ミスなし・音ミスのみ

ミスなしでは、3 名が該当した。音にミスがみられた者は 6 名で、回数は 3 回以内だった。

②音と運指・音とリズム・音とテンポのミス

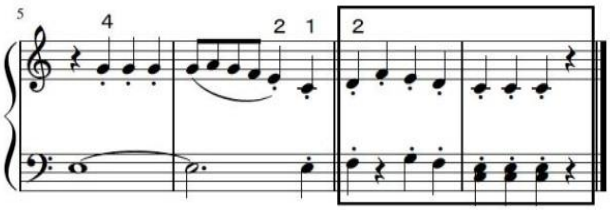
音と運指ミスでは 4 名が該当し、2 回以内の音のミスがみられた。運指ミスでは、両手ともミスがみられた者が 1 名、右手のミスが 2 名、左手のミスが 1 名だった。具体的な右手の運指ミスは、記譜された指番号が使用されなかった、5 指を使用しなかったなどである。左手の運指ミスは、下記の譜例 2 の四角で囲んだ部分で多くみられた。通常 G 音は 1 指で演奏されるが、2 指が使用された。

譜例 2　左手の運指ミスの箇所



音とリズムミスでは 1 名が該当し、音のミスは 10 回だった。多くのリズムミスがみられた箇所は(譜例 1)の最終部分で、下記の譜例 3 の四角で囲まれた箇所である。該当者はこの部分の前半を八分音符で演奏した。スタッカートは演奏されなかった。

譜例 3　リズムミスの箇所



音とテンポミスでは、2 名が該当し、音のミスは 2 回だった。なお、テンポミスについては部分的ではなく、演奏全体を通してテンポが遅かったり、頻繁に速さが変わったりするなど、4 拍子に聴こえにくい演奏を対象とした。

③複合型

音・運指・リズム・テンポの 4 項目のミスのうち、3 項目にミスがみられた場合を複合型とした。該当者は 5 名で、音と運指とリズムミスが 3 名、音と運指とテンポミス、音とリズムとテンポミスがそれぞれ 1 名だった。なお、複合型の該当者は、全員が学習経験をもたないという共通点がみられた。

④判別不可能

ミスが多発し、曲として形をなしていないためにミスの判別ができなかった場合を、判別不可能とした。該当者は 6 名で、止まりつつ演奏した者が 2 名、緊張のために指が震えて演奏にならなかった者が 1 名、途中で演奏をやめてしまった者が 3 名であった。なお、彼女らも学習経験をもたない調査協力者であった。

⑤右手奏

右手でメロディー部分だけを演奏した場合を、右手奏とし、7 名が該当した。右手奏になった理由は、予見時間に右手だけを練習していたため、両手で演奏できなかったケースと、調査開始時に「右手だけでもよいですか」と尋ねられたケースである。後者では、筆者はとくに両手奏をすすめなかった。なぜなら、調査協力者の現在の演奏能力を正確に判断するためである。なお、ここでの該当者もすべて学習経験をもたない調査協力者であった。以上が、ミスの種別による調査結果である。次に、得られた結果をもとに、年齢層別、成年までの学習経験別、成年後の学習年数別に集計する。

(2) 年齢層別の調査結果

次の図表 3 は、調査の結果を年齢層別に表したものである。

表 3　年齢層別の調査結果表　　（34 名）

ミスの種類	60 代		70 代		80 代	
	前半	後半	前半	後半	前半	後半
ミスなし		1		2		
音ミスのみ	1	4				1
音・運指		2		1	1	
音・リズム	1					
音・テンポ		1	1			
複合型	1	1	2	1		
判別不可能	1	2	1	2		
右手奏		1	4	2		
合計人数	4	12	8	8	1	1

年齢層別の調査結果では、年齢の枠を超えて多くのミスがみられた。なお、60 代後半と 70 代後半では、複合型・判別不可能・右手奏のミスの人数がほぼ等しいという結果が示されたことから、今回の調査では、年齢層によるミスの差はあまりみられなかったといえるであろう。

(3) 学習経験別の調査結果

前述したミスの種別による調査結果において、複合型、判別不可能、右手奏の該当者のすべてが学習経験をもたない調査協力者であったことからも、学習経験とミスの程度の差は明確である。しかし、ここではさらに年齢差が結果に影響を与えることをさけるため、あえて学習経験の有無の人数が等しい 60 代後半の 12 名を対象に集計した。学習経験をもつ 60 代後半の調査協力者の平均経験年数は 3 年 4 カ月であった。次の図表 4 は、調査の結果を学習経験の有無をもとに表したものである。

表 4　学習経験年数別の調査結果表　（60 代後半 12 名）

経験年数	ミスの種類	計（人）
1（年）	音ミスのみ 2、音・運指 1	3
5	ミスなし 1、音ミスのみ 1	2
7	音ミスのみ 1	1
経験なし	音・運指 1、音・テンポ 1、複合型 1、判別不可能 2、右手奏 1	6

※経験年数は、成人までの学習年数をさす

調査結果では、学習経験をもつグループは、比較的ミスが少なかったが、学習経験をもたないグループでは、多種のミスがみられた。この結果から、学習経験の有無とミスの程度には差があると考えられた。なお、学習経験年数には 1 年から 7 年の幅があったが、ミスの種別の

違いはとくに示されなかった。したがって今回の調査では、鍵盤経験の有無はミスの程度に影響されるが、経験年数にはあまり影響がみられなかったといえるであろう。

(4)　学習年数別の調査結果

学習経験の有無が結果に影響を与えないように、ここでは成人までの学習経験をもたない 24 名を対象に集計した。調査協力者の学習年数は、3 カ月から 9 年で、平均学習年数は、2 年 6 カ月だった。次の図表 5 は、調査の結果を学習年数別に表わしたものである。

表 5　学習年数別の調査結果表　（経験なし 24 名）

学習年数	ミスの種類と人数
半年未満	複合型 1 、判別不可能 3
半年から 1 年	複合型 2、判別不可能 1、右手奏 2
1 年から 1 年半	右手奏 3
1 年半から 2 年	ミスなし 1、音ミスのみ 1、複合型 1、判別不可能 1、右手奏 2、
2 年から 3 年	音ミスのみ 1、音・運指 2
3 年以上	音・リズム 1、音・テンポ 1、複合型 1、判別不可能 1

※学習年数は、成人後の学習年数をさす。

そもそも学習年数の長さとミスの程度に比例関係があることは言うまでもない。しかし図表 5 を、奏法（両手または右手奏）の視点から着目したところ、学習開始時は両手で演奏が行われるが、半年後から右手奏に変化し、約 2 年後に再び両手奏に戻るという興味深い結果が示された。なお、一般的な子どものピアノ学習では、学習開始直後は右手奏が行われ、その後次第に両手奏へと移行する。このことから、シニアのピアノ初心者には、子どもとは異なった奏法の流れがみられた。

４．調査の結果の考察

調査では、シニアの初見演奏能力の差は、年齢層別ではとくにみられなかった。しかし成人までの学習経験の有無では、ミスの程度の差は顕著に示された。したがって、シニアの初見演奏能力の差は、年齢よりもむしろ学習経験の有無に影響されると考えられる。なお、学習経験年数の長さとミスの程度には、とくに差はみられなかった。これ

に関しては、学習開始時の年齢や当時の学習到達度など、さらに詳しい調査が必要であろう。また、成人後の学習年数調査では、奏法の変化から、シニアの時間経過によるモチベーションの高低が予想された。例えば学習開始直後は学習意欲が高く、未知曲に対しても両手演奏に挑戦しようとする。しかし半年後には、両手奏への挑戦意欲が減退する。おそらくこれは、ピアノ学習の難しさや、演奏能力の限界を知ることなどによるモチベーションの低下が原因だと考えられる。そしてこの状態は、約 2 年近く続く。しかし、その後もピアノ学習を継続しているならば、再び両手奏での演奏に挑戦する意欲が増す。なお、この一連の学習過程はあくまで筆者の想像にすぎない。さらにシニアのピアノ学習者の心理的な側面に関する研究が望まれる。

５．調査の結果からみたシニアへのピアノ指導の検討

年齢層別調査では、シニアの年齢層と演奏能力の差に関係性はとくにみられなかった。しかし、加齢により身体能力が低下することは、周知の事実である。したがって、シニアへのピアノ指導では、年齢層をふまえた上で、個々の身体的特徴に着目した指導が必要であろう。

学習経験別調査では、学習経験をもつシニアは演奏能力が高く、どちらかというと指導しやすい学習者であると考えられた。そこで、彼女らが過去に得た知識や技術に着目し、それらを積極的に活かした指導を行うことができるならば、さらにシニアが満足するピアノ指導に繋がることが予想される。

学習年数別の調査結果の考察では、ピアノ初心者には、学習開始後半年後から約 2 年間に学習意欲の低下が予想される期間がみられた。シニアが学習を継続するためには、この時期の指導者との関わり方が重要であろう。しかし指導者にとってこの期間は、ピアノ学習がほぼ定着している時期であると捉えることが多く、学習開始当初の細やかな働きかけから遠ざかる頃でもある。シニアのピアノ学習者の退会理由は、このような指導者との学習者意識のずれが原因であることも考えられる。学習開始後半年から 2 年のシニアのピアノ初心者に対して、指導者は真摯に向き合い、教材の選択をはじめ、ピアノ学習を円滑に継続するための学習の目的や方法を、とくにしっかりと話し合う姿勢が望まれる。

おわりに

調査結果では、シニアの年齢層とピアノ演奏能力に関係性はとくにみられなかった。しかし平均寿命の延伸と高齢者の増加に伴い、さらに年齢層の広がりが予想されることから、引き続き加齢による演奏能力に着目した研究が必要であろう。また、成人までの学習経験が、数十年のブランクを経てもなおシニアのピアノ演奏能力に影響を与えていることがあきらかになった。それに加え、60 歳以上の年齢層における発達の関連性をさらに考察し、それに応じた学習・教育を導き出すことが求められる。さらに学習経験の集計結果に対しては、身体知の視点からの研究も必要であると考えられる。何故なら、ピアノ演奏は知識が瞬間的に身体運動に活かされねばならず、スポーツ科学などで研究されてきた身体知の音楽への応用が重要だからである。

注

注 1) 平成 23 年度および 28 年度社会生活基本調査結果(統計局)によると、60 代以上の楽器を演奏する高齢者の総数は、約 1.7 倍に増加している。また、全国楽器協会によるピアノ普及率調査では、2009 年から 5 年間で 5 万台増加している(2014 年は電子ピアノを含む)

参考文献

1) 竹中優子・小田利勝「音楽と高齢者：音楽老年学の構想」神戸大学発達科部研究紀要 14(2)、2007 年　139-146。
2) 元吉ひろみ・松田ひとみ「地域在住高齢者を対象にしたピアノ講座における感情及び手指運動機能の変化」日本プライマリ・ケア連合学会、36 巻 1 号、2013 年、pp,11-18。
3) 古庵晶子「シニアのピアノ学習における教材の問題 ：未知曲読譜の効果」白鳳女子短期大学紀要、6 巻、2011 年、pp.35-42。
4) 古庵晶子「中高年世代を中心としたピアノ学習におけるつまずき:成人用ピアノ教則本のあり方について」『関西楽理研究』(33)、70-87、 2016 年。
5) 石川裕司「高齢者のピアノ学習支援の方法:初歩の学習者へのインタビューから」東京学芸大学紀要、67 巻、2015 年、pp.1-11。
6) ヤマハ音楽能力検定ピアノ演奏グレード 9・8 級ワークブック 1993 年第 66 版